

千鳥ヶ淵の環境再生に関する勉強会のとりまとめ

1. 全体的な事項について

(1) 千鳥ヶ淵再生プランについて

事務局から以下のイメージが示された。

①再生プランの枠組み・位置づけ

- 今後の千鳥ヶ淵の環境再生の目標像とその実現に向けた取組を示す構想。
- 千鳥ヶ淵の環境再生への参画者の合意に基づき作成。
- 環境省は、プランに沿って取組実施、他の参画者には、各自の役割の中で取組への参加を期待。一般にもプランへの理解と協力を期待。

② 対象範囲、期間等

- 事柄の範囲は、歴史性、象徴性といった全体的な事項、自然環境、景観、利用、水質等。（水質は、千鳥ヶ淵単独を対象とした対策）
- 地理的な範囲は、千鳥ヶ淵及びその周辺。範囲は一律に限定しない。
- 期間は、平成25～27年からの水質改善後数年程度までを想定。

③ 想定されるプランの内容

- 千鳥ヶ淵の持つ特性、現状と課題
- 環境の再生・創造の目標像
- 具体的な取組（自然、景観、利用・環境教育、水質等）

これらに関しては、対象範囲について、民地との関係など範囲を明確にすべきとの意見があった。

(2) 再生の目標について

- 皇居外苑濠管理方針の「皇居の象徴性の維持を基調とし、歴史性の継承を図り、これらを損ねない範囲で自然環境保全等を進める」が基本。（事務局）
- 目標の捉え方は、自然、景観、利用という各要素の関わり合いを踏まえるべき。（参画者等）
- 心地よい環境と自然再生は方向性が異なり、自然再生か多くの住民が求める快適環境か明確にすべき（参画者等）
- 自然再生を無視したアメニティー機能の拡充は考えていない。（事務局）
- 目標設定や内容検討では、本地域が住宅地に面し地元住民が多い場であると

もに、海外からも日本の表玄関としても認識されていることから、地元住民から外国人まで幅広く情報発信、意見聴取を行い、合意形成を図るべき。（参画者等）

（3）進捗点検と順応的管理

- 各取組の進捗度の点検や、取組結果のフィードバックが重要。（参画者等）

自然環境、景観等個別事項についての議論について概要は以下の通り。

2 自然環境について

（1）目標の考え方

① 全体的な考え方

- 外苑濠が都心の貴重な自然環境であることを踏まえ自然環境の再生を図る。再生は、皇居の象徴性、江戸城の歴史性を損ねない範囲で実施。（事務局、参画者等同様意見有）
- 自然再生では目標とする時代と指標種の置き方が重要。（参画者等）
- 指標は、1つだけではなく、複数あったほうがいい。（参画者等）
- （震災後）都心の緑の存在価値の評価もアメニティー重視から生物多様性保全にシフトしており、いままでと異なる目標設定が必要。（参画者等）

② 千鳥ヶ淵が元来人工的な環境であることについて

- 通常自然再生の考え方や目標・指標のたて方の適用は難しい。濠として建造された事実は、自然再生の際に考慮すべき。（参画者等）
- 厳密な自然再生は困難だが、周辺の水辺環境の状況を踏まえ、地域の在来種、種内多様性に配慮した取組を実施したい。（事務局、参画者等同様意見有）

③ 目標とする時代・種

- 千鳥ヶ淵には外来魚もおらず、都内で希少な種、在来の東日本系統も生息。種を持ち込むより、水質や水生植物の再生を図り、既存の種の増加や周辺からの種の入り込みを促すべき。（事務局、参画者等）
- いつの自然に戻すかは、原生の自然ではなく、自然環境が激変する直前で、今生きている人が思いだせる時代を指標とすることが多く、1970年代頃とする事例が多い。（参画者等）
- 少し以前まで郊外に普通にあったため池のような環境が都心にあるということは大きな意義。（事務局）
- 今いるものを基本とするのは現実的な考えであるが、サクラやホタルではなく、

江戸時代に生息していた種を再生するなど、もう少し夢のある自然再生も考えたい。(参画者等)

- 東京周辺の在来魚を見ると昭和40年頃大きく変化。これ以降、在来種が国内移入種や外来種により減少・絶滅。関東低地では遺伝的に同じと考えて良く、以前いたと思われる種の復元は試みるべき(参画者等)
- 議論の出発点としては、今いるものをベースであるが、今後の議論や取組のなかで、今生息生育している生物だけに限定はしない考え。(事務局)

④ 水辺と陸域の取扱い

- 水辺環境と陸域は性格が異なるため扱いも異なる。水辺は、良好な生態系をめざすが、陸域は、景観や公園としての機能確保を主に、その中で緩衝帯、コリドーとしての機能を確保。(事務局)
- 緑道側堤塘と水中は必ずしも分けなくて良い。生態系や景観への配慮を前提に濠とつながりを持たせた方がいい。(参画者等意見、事務局も同意)

(2) 再生の方法、技術的事項

①再生の手法

- 水質浄化、侵略的外来生物の制御など負の因子を取り除くこと。(参画者等)
- 淡水魚の生息地には水路と池のセットが望ましいが、千鳥ヶ淵はそういう環境ではない。しかし、種の危険分散には利用できる。(参画者等)
- 他濠の底泥からの土壌シードバンクにより再生を試みると良い。(参画者等)
- 千鳥ヶ淵には、水辺植生が成立する遠浅の環境がない。遺構の改変はできないので、浮魚礁設置が考えられる。(参画者等)

②外来生物、コイ、ハス・ヒシ対策

- 食圧の高いコイとアメリカザリガニは水生植物に対しても在来魚の回復のためにも、除去する必要あり。(参画者等)
- ハス・ヒシは富栄養化した池の共通の出現種。特にハスは水面を覆って沈水植物や魚類の生育・生息を妨げるので除去すべき。(参画者等)
- 千鳥ヶ淵にハスが繁茂していたという歴史的資料はないが、排除については合意形成が必要。(事務局)

③ホタル

- 千鳥ヶ淵の隣の牛ヶ淵には、ヘイケボタルが生息。由来は不明で、現在、遺伝子調査中。(事務局)
- ホタルは、再生のわかりやすい結果となりうるが、同種でも遺伝的国内外来種

は生物多様性保全上問題（事務局、参画者等）。

- 現在生息するホタルについても、その増殖だけを目指すのではなく、濠の生態系全体の再生を目指すべき。（事務局）
- 観光の観点から、千鳥ヶ淵の一部でホタルが飼えないか。（参画者等）
- 明治期に日比谷濠でホタル狩りの記録があり、過去の事実にも配慮すべき。現在濠にいるホタルの保護も必要。（参画者等）

（3）再生計画の実施、情報提供、合意形成

- 自然環境の改善は、景観、利用等に対し単純に改善とは言えない変化も及ぼす可能性（濠の水の色、コイの扱いなど）があり合意形成が重要（事務局）
- 再生に関わる人が将来像や夢をある程度共有する事が重要。誰のための自然を再生し、人々が何を望んでいるか考えるべき。外苑は、自然の存在価値（生態系サービス）のうち文化的なものが重視されていい場所。（参画者等）
- New Commons（新しい形態の共有地）など里地・里山の維持管理についても参考になる。（参画者等）
- （マスメディアの参画者として）サクラやホタルなどわかりやすいところから具体的に計画が進んでいけばと思う。（参画者等）

3 景観、サクラについて

（1）景観

- 景観は、見る人の状況に左右されることを踏まえ、景観利用の実態把握を進め、そこから改善点の有無を検討。（事務局）
- 景観は合意形成のあり方が問題。（参画者等）
- 景観の特性上、濠水面のみならず周辺地域や利用動線を含め議論（事務局）
- 移動しながらの動的な景観に対する視点からの検討も重要。（事務局）
- 水質や自然の再生に伴い景観が変化する可能性。既存の景観への配慮と新しい景観への受容の両面で認識の共有が重要。（事務局）
- 周辺街路の景観要素との調整も望ましい。（参画者等）

（2）サクラ

①千鳥ヶ淵におけるサクラの位置づけ、歴史的経緯

- 千鳥ヶ淵のサクラは、明治以降の歴史や文化的背景があり、サクラの名所として評価されるが象徴性や歴史的景観との調整が必要。（事務局）
- 過去の千鳥ヶ淵周辺の管理者や整備内容、意図の変遷を整理・把握すべき。現在の千鳥ヶ淵のサクラのイメージに対して、事実がどうだったか認識を共有することが議論を進めるために必要。（参画者等）

- 今後樹種をどういう論理で植栽するかを考えるために、過去の経緯を調べて景観改善のためのサクラ植樹の歴史の文脈を引き継いでいることが言えればよい。（参画者等）
- 千鳥ヶ淵周辺のサクラについて現在のようにソメイヨシノばかり目につくようになったのは、昭和 30 年代末以降で比較的新しい。（参画者等）
- 東京のサクラは江戸時代に各地の名物桜が集められた経緯から、国内でも多様なサクラを見られるのが特色。千鳥ヶ淵の考え方にも生かしてはどうか。（参画者等）
- 歴史的に、どの時代をターゲットにするのかも合意形成の視点。（参画者等）
- 千代田区等でサクラ保全の取組が進められており、これをベースとして検討。（事務局）
- 樹種の選択に特化した話をすると日本人の嗜好性、文化論につながりかねないという慎重論が関係者からあった（事務局）。
- ソメイヨシノは人工的で自然とかけ離れているという意見があるが一般のソメイヨシノのイメージと樹種変更は扱いが難しい問題。（参画者等）

②老木化への対応

- 現在のサクラには老木化による樹勢低下や成長による鬱蒼とした景観などの問題が存在。改善のためには、部分的な伐採・整理と後継樹や植栽場所の検討が必要で、そのための合意形成が重要。（事務局）
- サクラ老木はあと 10 年ほどで枯れてしまうため「区の花さくら再生計画」をたてているが、今後の植え方や位置づけは大きな問題。（参画者等）
- サクラ老木伐採は不可欠だが、反対意見がある。（参画者等）
- 堤塘のサクラは伐採・伐根の必要があっても遺構保存の観点で実施が難しい。ナラタケ菌対策の面からも、今後、堤塘へのサクラ植栽は難しい。（事務局）

4 利用、環境教育について

(1) 利用

①現状と可能性

- 利用時期の観桜期への集中や利用形態の限定が問題視されており、時期の分散化や形態の多様化が必要。（事務局）
- 利用時期の分散化には、サクラ以外の資源開発（四季を通じて楽しめる工夫や周回利用推進の取り組み、水辺利用の推進）が必要。（事務局）
- 一部利用者には自然観察や環境教育の場として利用されている場所もある。（事務局）
- 把握不十分な詳細な利用現状と課題、ニーズ、利用資源は改めて把握し、問題

点と今後の利用展開の可能性検討が必要。（事務局）

②周回歩道利用の推進

- 散策、ボート利用に限られている現在の利用について、象徴性や歴史性を損ねない範囲で、新たな利用動線や利用形態を検討。（事務局）
- 千鳥ヶ淵は皇居外苑濠で唯一、一般通行可能な周回歩道があり、園路としての潜在性が高い。今後は各管理者が周回歩道を意識し管理。（事務局）

③新たな利用形態の展開

- 北の丸公園で試みられている環境教育、自然とのふれあい、環境改善の取組を組み合わせた利用形態を他にも広げるとともに、今後の環境改善に伴い、千鳥ヶ淵の水辺の利用拡大も考えられる。（事務局）
- 千鳥ヶ淵緑道で先行事例がある四季折々に訪れたい魅力づくりを千鳥ヶ淵でもすすめる、サクラの時期への過度の集中を緩和。（事務局）
- 千鳥ヶ淵単独ではなく、周辺の公園、利用施設、資源等と連携した利用を想定した取組の推進。（事務局、参画者等）

④利用を促進する情報提供・情報発信

- 皇居と皇居外苑は、日本の表玄関の中心。外国人や地方出身者にもわかりやすい情報提供をする。（参画者等）

（2）環境教育・情報提供

①現状と可能性

- 国民公園は、環境教育・環境学習の拠点としての位置づけがあるが、皇居外苑においては具体的な取組は少ない状況。（事務局）
- 一部には北の丸公園や外苑濠で自然観察会等の実施例があり、千代田区によるサクラ保全に関するプログラムも有。（事務局）
- 水質、自然環境の改善後は、千鳥ヶ淵は北の丸公園など周辺と一体で都心の貴重な水辺・緑地環境として環境教育のフィールドとなる可能性。（事務局）
- 環境改善の取組自体も資源として活用できる可能性があり、様々な主体との連携が考えられる。（事務局）
- 環境教育には「体験→知識獲得→環境保全の行動」という教育の目的がある。行動の場の設定も考えられる。（参画者等）

②情報提供と合意形成

- 環境教育プログラム作りは、人によって考え方が異なるため、合意形成が必要。

(参画者等)

- 千鳥ヶ淵全体の環境改善にむけた合意形成のためにも、環境教育は活用していきたい。(事務局)

5 水質

(1) 水質に関する基本認識

- 皇居外苑濠の水質は、玉川上水からの水供給が途絶え、下水からの雨天時の越流、落葉等の流入、堆積により水質が悪化。(事務局)
- 千鳥ヶ淵の水質は現在皇居外苑濠の中で最も悪く、夏から秋にかけてアオコの大量発生が見られる状況。(事務局)
- 都下水道の雨天時越流は平成 25 年以降に停止の見込み。水質改善には並行した取組が必要であり、環境省では皇居外苑濠水質改善計画を作成。これに基づき新浄化施設整備等の取組を実施し、今後外苑濠は水質改善の見込み。(事務局)

(2) 底泥対策

- 千鳥ヶ淵には底泥が厚く堆積しており、将来的に、水質改善、生物の生息環境改善のために底泥対策が必要となる可能性。(事務局)
- 底泥対策は浚渫、覆砂などの手法があるが、施工費が大。より簡便な手法として濠の干上げや一時的な水位低下による底泥の露出も検討の対象。生物との関係での配慮が必要。(事務局)
- 干し上げ等について実施の効果予測のため、干し上げ前後の牛ヶ淵の生態系と比較するとともに、配慮すべき生物の特性について、事前に整理が必要。(参画者等)

(3) 雨水等の活用

- 現在、外苑濠は水源を専ら雨水に頼る状況。このため、雨水等の導水やそれらの一時貯留などの対応が重要。(事務局)
- 千鳥ヶ淵周辺は、北の丸、千鳥ヶ淵戦没者墓苑等の国有地もあるが、効果的な雨水活用には他の主体の協力を得ることが重要。(事務局)

(4) 水生生物の適切な管理

- 将来的に水質が改善された状況で、水生生物の適切な管理により、水質維持と良好な生物環境の再生を図ることが重要。(事務局)
- このために、水質に影響のある生物(水生植物、コイなど)の取り扱いについての検討が必要。(事務局)

6 その他の論点

- クールアイランドとしての機能、光環境（特定の生物にとって夜の暗さが必要）、静穏性など、皇居一帯の緑地の持つ機能の一翼を担っており、それらの維持、改善が重要。（事務局）

1. (